『春日横丁ラプソディ２．５
千里食堂細腕繁盛記』より

冬の微熱の日　お試し版

河原の橋の下を、冬風が滑りぬけてゆく。
頬を撫(な)でるその空気の冷たさに――千里(ちさと) 桐香(きりか)は、自分の頬がどうしようもなく火照(ほて)ってしまっていることを意識する。
とくん、とくん、と、制服の胸の中で、肋骨(ろっこつ)を内側からノックする勢いで跳ねる心音。
あああ。
どうしてこんなことになっちゃったのよ……！　と、桐香は錯乱気味に記憶の糸を手繰(たぐ)る。
けれども、思い出せない。

早まる心臓の音が耳にまで届くようで、思考を押し流していく。
身をちいさく縮こまらせたまま、桐香は震える指で眼鏡を正した。
それくらいの行動しか、とれるスペースはない。
桐香の後ろには、上を行く鉄橋の支柱である、コンクリートの壁。
そして両側はそれぞれ、制服の腕で挟まれている。
正面に立つ幼馴染――万屋（よろずや）みなみが、壁についた手。
その両腕と、みなみの身体と、後ろの壁がつくる狭い四

角形のなかに、桐香は先程から閉じ込められているのだった。

夕暮れ近い冬の陽(ひ)が、みなみの顔を淡い茜色に照らしだす。

この季節なのに小麦色な頬に、浮いたかすかな上気の色。けれども、自分のほうの顔はそれ以上に、夕陽にも隠し切れないくらいに火照(ほて)って真っ赤になっているのが、桐香にはわかる。

「桐香」

みなみの唇が、名前を紡いだ。

いつもよりも静かな、すこしトーンの低い一声。
声が真面目なのと一緒で……いつもならばのほほんと能天気な笑みを浮かべたみなみは、きりりと眉をしかめて正面から桐香の顔を見据えている。
「――ちょ……ちょっとっ、なによっ」
ようやくあげた声は、浮足立ってうわずってしまい。制服の肩をいからせたつもりが、四角形の中で身をすくませたようなかたちになってしまう。
「なにふざけてるのよ、怒るわよっ……！」
口にした自分の言葉が、上滑りしてしまっているのはわ

かった。
目の前のみなみが、ふざけてなんていないのは明らかだったからだ。ほんの数十センチの距離でこちらの目を見つめたみなみの、澄んだその瞳を見れば。
か細い桐香の声に、みなみは言葉では応えず。
真剣なまなざしで正面から桐香を見つめたまま――すこし両腕を曲げて、桐香に顔を近づける。
ひうっ、と、へんてこな息が喉を抜けた。
直感的に、伝わってきてしまったからだ。
生まれてから十三年、同じ横丁、隣同士の店と家に育っ

てきた幼馴染の少女。
彼女がこれから、何をしようとしているのかが。
いつもならばもっと至近距離でも特に何も意識しないのに、正面三〇センチに近づいたみなみの顔が、やけに近く感じられて……さらに鼓動のリズムを早める心臓が、ほっぺたにさらなる熱を押しあげてくる。
唯一の退路へ、下へ、桐香は制服の背が壁を擦るのもかまわず逃れようとして、
「――動かないで」
耳に届いた一声が、楔のようにその動きを縫いとめた。

凛と、した。

万屋 みなみらしからぬ――けれどもなぜか、みなみらしいと思えてしまう、声と表情。

耳に届いた、息を吸い込む音が、自分のものなのかみなみのものなのか、それとも両方なのか。それすらももう、桐香にはわからない。

一瞬で、けれども果てしなくゆっくりとスローモーションで、みなみの顔が、まなざしが近づく。

思わず目を閉じた瞬間、音すらも消えて、世界には感触だけが残る。

唇を、くすぐるような。柔らかく触れる、温かみの。

「うわぁあああっ！」

はねあげた両足が、ぼふん、と音をたてて柔らかな何かを蹴りあげた。

一秒遅れて、覆いかぶさるように落ちてくる塊。

顔を覆うそれを懸命に払いのけると、ぼやけた視界には天井板の木目が映った。

「……」

ここに至って千里 桐香は、ようやく理解する。

自分の部屋の、布団の上。
折れ曲がった大の字のような姿勢で、あおむけになって目が覚めた自分を。
――ゆ……め……？
身体の中のこわばった芯が一斉に抜けて、くたん、と桐香はひらべったくなる。
脱力しているのに、身体の中で心臓だけはでたらめにリズムを刻んで、存在を主張していて。冬の朝なのに汗だくになった、パジャマの中の肌着が、熱くて冷たい。
「なっ――なんなのようっ」

情けない怒声をあげて、桐香は跳ねるように身を起こした。

そのまま立ちあがろうとしたけれどかくんと膝の力が抜けて、四つんばいの格好になって、呆然と十秒近くが過ぎてしまう。枕元の眼鏡をようやく掴んでぎこちない動きでかけると、なんなのようもうっ……！　と桐香はもう一度口にしながら布団を叩く。

なんだ。なんだったのだ、いまの、あの夢は。

座り込んだまま、両手をあてた頬が、汗ばんで、熱い。

帰り道のいつもの橋の下、みなみと、あんな。

弱々しいしかめっ面、とでもいうべき面もちで、桐香はまだ荒さがおさまらない息を吸って、吐く。

落ち、着け、私。

――布団とか腕とかが、へんなとこにかかってたのかしら。

本か何かで読んだことがある。仰向けに寝たときに胸に手を置いてしまっていると怖い夢を見やすいとか、布団が顔をくすぐっていても何らかのかたちで夢見に影響することがあるとか。

だとしたら。

もしかしたら今朝は、布団の上のへりが唇をくすぐるとかしてしまっていたのかもしれない。

だから、あんな。

唇。

動揺を鎮めようとして懸命に巡らせていた思考が、妙な場所にヒットしてしまう。

頬からスライドした指先で、桐香は自分の唇を押さえた。

真剣な表情を浮かべた、正面至近距離数十センチの、みなみの顔。夢の中の最後の瞬間、唇に触れた、やわらかな、その

「わ、あ、あぁあ」
眼鏡の中で目を見開いて、桐香はへたりこんだままぶんぶんとかぶりを振った。
目覚まし時計が指し示す時間は、アラームが鳴るまでまだあと三十分ほどあるけれど――肌着ににじんだ汗とまだ沈静化してくれない心臓のリズムは、いまさらもう一度横になっても、桐香に睡眠を許してくれそうにはなかった。
「きーりかー！」
「ひっ！」

後ろから声とともに両肩を揉まれ、桐香は思わず背中をのけぞらせた身体を伸びあがらせた。
放課後の、中学校の昇降口。周りにいたクラスメイトたちが桐香の悲鳴に一瞬目を向けて、ああ、という感じに笑いつつそのまま通り過ぎてゆく。
「あれ？　どしたん桐香。大丈夫？」
そのまま肩をぽんぽん叩く手と、耳に届く聞き慣れた声。
「ど、どしたのって――なによいきなり後ろからっ！」
かぁっと頬に血をのぼらせて振り向く桐香に、万屋 みなみは不思議そうに首をかしげ――

幼馴染のその顔を見て、桐香はわれに返る。
いまのはたしかに別に、こんなに怒るようなところではない。みなみは普段からだいたいこの調子だし、特段いつもと変わったことをされたわけではなく。
変なのは――
こほんっ、とひとつ咳払いをして心の混線を振り払うと、桐香はレンズ越しの上目遣いに幼馴染の顔を見あげた。
「いやさあ――ほら、今朝遅れてたみたいだから、大丈夫だったかなって」
言ってみなみは、いつもの呑気な笑みを浮かべる。

「……大丈夫よ、ちょっと寝坊しちゃっただけで」
唇をとがらせて、桐香は不愛想に応えた。
そう。
今朝のあの、たいへん心臓に悪い夢からさめたあと。
しばらく布団の上でもぞもぞしていても、へんてこな頬と身体の熱は冷めてはくれず――汗だくになっていたのもあって、シャワーを浴びて。
それでもなんだか挙動不審極まりないところをさらしてしまいそうだったので、嘘をついて寝坊したことにして、横丁メンバーには先に学校に行っていてもらったのだった。

特にこう、目の前のこいつと顔を合わせると、どうにもいつものペースが保てなくなってしまいそうだったというのもあって。放課後まで時間を置いて、よくわからないこの微熱を冷まそうと思ったのだ。

思っていた、のだけれど。

「そっかあ。

んー、でも、ほんとに平気？　桐香。なんか頬っぺた赤いし、風邪とかひいてない？」

「だっ――だいじょうぶだっていってるでしょ！」

両手の指をぎゅっと握って声を発しながら……みなみの

言う通り、頬の内側の温度が高まってしまうのを桐香は感じている。

放課後まで時間をおいても、調子はもとに戻ってくれない。

目の前の、みなみの顔。

同じ横丁の幼馴染で、ちいさな頃からそれこそ何千回、いや、何万回かもしれないくらいこの距離で目にしてきた慣れっこな眺めのはずなのに。

――動かないで。

今朝の夢の中の静かな声と、静かな表情が重なってしま

い、心拍数がまた上昇気味になってしまう。
「でもほんと、無理しちゃだめっすよー。年初めから疲れて風邪ひいたりしたらもったいないんだからさ」
「わかってるわよ」
返事はまたつっけんどんになってしまい、それとはうらはらに頬の温度は上昇してしまい。
「……ありがと」
なんとか礼の言葉は付けくわえたものの、うまく視線も合わせられない。
ああ、もう。と、桐香は眉を八の字にして眼鏡の位置を

ただす。
はやくほかの誰かが来てほしいような、こんなところを見られるのもなんなのでもうちょっと時間をおいてほしいようなで――
「いやいや。んじゃ、行こっか」
「えっ？」
通学鞄を肩にかけなおして歩みだすみなみの背に、桐香は呆けた声をあげた。
「ちょっとっ、待たないの初穂たち――」
同じクラスの薫は今日は委員会の用事があるのを聞いて

いるけれど、初穂と桃子をもうちょっと待ってもいいのでは――

「ん？　あ、そっか。今朝居なかったんだもんね」

頭の横っちょで結んだ髪をくるりとなびかせ、みなみはこちらに笑顔を向ける。

「初穂はいっしょに買いものに行くから薫を待ってるって言ってて、桃子は藍ちゃんの練習を応援に行くって言ってた」

「え」

へんてこな声をあげ、桐香は一瞬固まった。

薫と初穂と桃子が別帰り。ということは、その、つまり、ええと。

いや、ええと、なんて考えなくても単純に5引く3は2なわけで。

「どしたん桐香ー。だいじょうぶ？　ほんとに」

なんだか挙動不審気味になってしまっていたようで、みなみが少し心配そうに顔をのぞきこんでくる。

「大丈夫よ、さっきもいったでしょっ」

声をあげ、通学鞄の持ち手を両手でぎゅっと握って桐香は歩き出す。

すたすたと早足気味に、昇降口から校庭へ。妙に靴底がこすれた音をたてると思えば、ひざをまっすぐにしたまま歩いてしまっていることに桐香は気づく。

だいじょうぶだけれど、なんだかだいじょうぶではない。

運動部の練習の声が響く、冬の午後の校庭。

一月ももう三週目に入ったけれど、空はお正月の続きのように高く晴れ渡っている。

「それでさあ、五郎さん結局準備の日のうちにお餅試食しすぎてさ。お正月、お雑煮見るのも嫌になっちゃったんだ

って。この間、写真屋の銀次さんに『喉に詰まらせたら遺影くらいは提供してやれたのにな』ってからかわれてた」

笑いながらみなみが、年末年始の商店街の行事手伝いのときのエピソードを披露する。

五郎さんは、釣具屋の寛治郎（かんじろう）さんと連れ立ってよく千里食堂にもいらっしゃる、酒屋のご隠居さん。銀次さんはすこし強面で口の悪いことでも知られる、四ツ浦（よつうら）写真館さんの店主さんだ。

五郎さんも銀次さんもそれらしくて、光景が目に見えるようだ――とは思いつつ。桐香は曖昧にうなずいたのみで、

どうにもリアクションが薄くなってしまう。
学校からの帰り路。お寺や神社やお屋敷の建ち並ぶ静かな街区を抜け、冬空が目の前にひらけて。
その空の下に、川と、川にかかる橋が近づいてくる。
橋――橋の、下。
緊張で、ごくりと喉が鳴ってしまうのがわかる。
夢の中に出てきた橋の下が、いつも渡っているこの橋の下であることは、あのときに見えた風景からも明らかだった。
正面に立ったみなみの後ろに見えた、冬枯れの土手と土

手の上の路。
その風景を覆い隠すように、近づく、みなみの顔。真剣なまなざし――
わわわ……！　と、目を見開き、頭の中に再生される記憶の映像を振り払う。
隣のみなみが呑気な笑顔の頭上にちいさな「？」マークを浮かべてこちらを見ているのに気づき、「いえ、その、ちょっと虫がっ」と口ごもりながら手のひらで顔と髪をはらってみせる。どうみてもとってつけた感ありありの言い訳で、言っていて頬がまたかぁっと熱くなってしまう。真冬

なので虫などいようはずもないのだ。
とはいえ幸いなんとかごまかせたようで、みなみはそっかあ、とうなずくと、欄干（らんかん）の向こうに広がる河原を見渡した。
「藍ちゃん、今日はどこで練習してるのかなあ。河原のグラウンドだったら、ちょっと見に寄ってもいいかなあって思ったんだけど」
「平日に河原まで来ないでしょ。小学校の校庭借りて練習とかじゃないの？」
遠くに見える、午後遅くの陽射（ひざ）しに照らされたグラウン

ドは、いまは無人のままだ。
みなみに気取られぬよう、桐香は静かに長く息を吸って、吐く。よしよし、なんとか落ち着いてきた。
「んー、そうかなあ。桃子に聞いとけばよかったなあ。あ！　そういえばさ、桐香」
「何よ」
普通に問い返しているだけのつもりなのに、なんだか警戒感あらわというか、挑みかかるような口ぶりになってしまう。
「この間お泊まり会のときに食べたかぼちゃのそぼろ煮、

あれほんと美味しかったなあ。
千里食堂のメニューに加えないの？　絶対いけると思うんだけどさ」
「な――なによいきなりっ……」
うわずった声が、唇を洩れいでた。
頬が、一瞬で急速に熱を帯びる。
不意をつかれた照れと、褒められた嬉しさと、嬉しさを感じてしまっている自分へのさらなる照れがおかしな具合に渦を巻いてしまって。
「いやあ、桃子んちのこと話したから、桃子のところで食

べたなあって思い出してさ」
そう。
練習中試作品のかぼちゃのそぼろ煮をはじめてみなみたちに食べさせたのは、お三が日明けに桃子の家で行われたお泊り会でのことだった。
それを考えれば特にまあ、みなみの話のつながりは唐突ではないわけで――やっぱりちょっと落ちつけ私、と、桐香は熱を持ってしまった唇を引き結ぶ。
いつのまにかふたりは、橋を半ば過ぎまで渡り過ぎて。駅前商店街がある側の袂と土手とが近づいてくる。

おそらくは、この真下あたりか。
夢の中で、あんな不可解なことになってしまったのは。
なにやらまた妙ちくりんにリズムを早める胸のあたりを片手でおさえつつ、桐香は早足に歩き出そうとして、
「やっぱりこう、桐香と結婚しようという思いを新たにした次第ですよー」
さらりとみなみの発した一言が、心臓を直接にノックした。
「な、わっ、」
凸凹(おうとつ)もない橋の歩道で、桐香はつんのめってよろけかか

る。
「きりかっ」
うしろから抱きとめられて転ばずにはすんだものの――ひやっとしたのが引いたのと同時に、頬の内側から、爆発するような火照(ほて)りの波が肌におしあがる。
「ちょ、ぁ、待――はなせー！」
両腕ごとしっかり抱きしめられているので、もがくと逆に、くっついたみなみの身体の感触がしっかりと伝わってきてしまい、桐香はなさけない悲鳴をあげた。
頭の中に、いくつもの映像がくるくると入れ替わって瞬

く。
夢の中の真剣なみなみの表情。オムライスの試作品を頬張って目を細める笑顔。この間お風呂屋さんに行ったときの、腹筋のラインの浮いた裸の身体。夢の中の、近づくまなざし。
うがぁぁっ！　と、ほどけた腕からよろめき出でて、桐香は最大限に肩をいからせながら幼馴染に向きなおる。
「いきなり何言いだすのよ馬鹿っっっっっ！」
ぎゅっと握りしめた、その手の内側まで熱をもってしまっている。

「んー……？」
濃いめの眉をしかめて、万屋 みなみは何もない中空を、探すように見あげた。
「何って、何？　変なこと言った？」
ああ、もう。
こいつはこいつはこいつはこいつはこいつは。
「言ったわよ！　なによっ、そのっ、け、結婚とか！」
「んー……？」
まったく同じ声を繰り返して、馬鹿者はやっぱりわからない様子で、自分のあごに白い手袋の指をあてる。

「いつも言ってる通りだけどなあ」
ああああああ！
「そうじゃなくてっ！　なんでよりによって今日っ、ここでっ――」
「え？」
きょとんとしたみなみの声と表情に、桐香はわれに返る。
たしかにこう、みなみがきょとんとしてしまうのも無理はないし、みなみのほうに言葉の分はある。こっちは前提を隠したまま、勝手に動転して普段通りのみなみに文句をつけ続けているわけで。

分は向こうに、あるのだけれど、こう、うああ。
「……桐香さ、ほんとうにだいじょうぶ？」
不安そうに片方の眉をひそめて、みなみはこちらに顔を近づけた。
「学校でなんかあった？　それか、風邪ひいて熱っぽかったりしない？」
「……何もないわよ。あったら言うでしょ」
「ほんとかなあ。言わないことあるっしょー桐香ってば」
ちょっと人の悪い苦笑――とでもいうべき表情とともに、みなみが厚手の手袋の片方をめくった。

指先にその手袋をひっかけたまま、手のひらを、こちらのおでこに近づける。
ちょっと、まって、何、を、
目を見開いて固まる桐香の額に、ぴとん、とみなみの手のひらは触れる。
手のひらだけじゃなくて、みなみの顔も、数十センチの至近距離にあって。
「やっぱりすこし熱くない？　汗もかいてるしさ――」
「んっ、だっ、大丈夫だって言ってるでしょっ！」
怒声というより悲鳴に近い声とともに――沸点に達した

動転におされて、桐香は後ろに飛びのく。
飛び退きつつ、振り回したその、腕が、
「わっ」「あ！」
みなみが驚いた声をあげ、桐香も思わず息をのんだ。
振り回した腕の、手の甲が、思いもかけぬ強さでみなみの手に当たってしまったのだ。
斜め上に払いあげられる形になったみなみの指から、手袋が外れ飛んで。
目にしていた桐香も、動くことはできなかった。
夕風にさらわれた厚手の白い手袋は、ふわりと欄干を越

え――呆然（ぼうぜん）とするふたりの視線の先で、橋下の枯れ草の海に吸いこまれて消えた。

お試し版はこちらまでの内容となっております。

『春日横丁ラプソディ２．５』は、
コミックマーケット１０２　２日目
東５ホール　パ－１０ｂ　懐中天幕
にて発行の予定です。

ｐｉｘｉｖにも別の短編を掲載しておりますので、こちらもご覧くださいまし。

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20395498